

発行所 社会通信社 発行人 滝野 忠

ホームページ <http://shakaitsushin.cool.coocan.jp/> e-mail: shakaitsushin@nifty.com

東京都渋谷区本町六丁目二八―二九〇四 電話・FAX(03)3299-5367

郵便振替 〇〇一〇〇―九一五八四三一 労金 中央労金本店 No.1154163

〈もくじ〉

■巻頭言■

情勢について (二)

滝野 忠：2

逆立ちした世の中を変える

森 勉：3

― 洪沢栄一にみる、資本家の哲学 (二) ―

労働者協同組合法の成立と

山下 俊幸：6

国 労 闘 争 団 の 経 験

日本共産党綱領について

原野人：9

◇信州松本通信◇

「新 松本百景」で紹介された

中澤 秀行：11

向坂逸郎著『マルクス伝』

読者からのおたより

..... 16

旬刊社会通信

NO.1339

二〇二一年七月一日号

二〇二一年七月一日発行
(毎月一日・二五日二回発行)

近 づ く 選 挙

情 勢 に つ い て (1)

選挙である。選挙は議会制民主主義にあつて最高の階級闘争の一つの姿である。都議選(7月4日)、静岡知事選(6月20日)、那覇市議選(7月11日)と続く。都議選で共産、民主が伸び、那覇でデニーさんが勝ち、静岡でリニアの原案に反対する現職が勝てば、菅首相は「危機」に立つ。衆院の任期満了は10月21日、菅の自民総裁任期は9月30日。自民は3つの補選(4月26日)に全敗、コロナ、五輪対策は菅の支持率は下降傾向を強める。一億五千万の買収資金、菅原前経産相の選挙違反への二階幹事長の発言には、自民の危機感はない。

政治権力の基礎は組織と力である。自民は機関紙は無いに等しい、100万党员の多くは大企業の幽霊党员、党費は安く党への帰属心はない。が、全ブルジョア階級が支援する。読売、産経が発行する新聞が自民機関紙となる。ないないづくしだ。国営放送のNHKも。かくて、自民を思想宣伝する媒体は「万全」である。

金もゆたか、政党交付金は170億円。原資は国民一人あたり一三〇円の税金。税金は権力者にとつての共同の財布。権力政党自民は被搾取からの税を「共同の財布・金庫」とすることで、法人諸税よりはるかに多くを大企業に還元する。自民への献金も同じである。元を取れるから金を出す、「秘密裡」に。アキタフーズの元農産相の収賄は河井事件の捜査からわかった。資本と賃労働、搾取する者とされる者の対立、階級社会の現実である。

自民党政治は第二次大戦の吉田、鳩山以降、弾圧、反動、腐敗、墮落の連続だ。今は河井夫妻の選挙違反事件と有罪判決。安倍―二階―菅は党内の支配権を強めるため、自派の河井夫妻を一億五千万で、河井夫妻は安倍の意をくみ地方議員を、地方議員は金をどう使ったかわからないが己の支持者を買収した。

日本の政党は5つである。自民は全ブルジョア階級を支持基盤とする保守党である。マルクス主義理論の混迷と社会政策派の跋扈(ばっこ)は学問上の概念をすっかり変えた。「保守」という言葉もそうである。筆者は保守を「資本主義という体制を守り維持する個人と組織」と考える。

立民、国民は労働再編、政界再編で総保守勢力がつくった民主党を「親」にもつ。指導者の多くは組織と規律を嫌う。おれがいちばんの個人主義、自由主義者である。

公明は貧乏人を基盤とした宗教政党。自民と一体となり党内の矛盾は深刻に。日本維新が生まれた大阪は日本資本主義発祥地。今、大阪府は日本一貧しい。零落した中小経営者、貧乏人は公務員や労働組合を組織し己の生活と地位の向上に努力する労働者を「特権層」と攻撃する。都民ファーストは東京都議会に限られ、維新と同じ階級的性格をもつ。

共産は労働者階級の党として党员30万、機関紙100万、議員約3000と100万全労連、さまざまな勤労諸階層を支持基盤とする。社民は20年11月、社民と立憲に分裂した。社民は「社会民主主義」を掲げる。労働組合の支援で500の地方議員をもつ。分裂は市民主義の党とした。

『社会通信』は1977年の創刊以来マルクス主義を編集の柱においた。マルクス主義者たちは自信を失い、動揺する者がふえている。客観情勢はこれまでの生産力と生産

関係の矛盾を「コロナ」が激化させた。社会主義への物質的条件は成熟している。社会主義実現の主体的条件たる労働者階級の階級への形成、組織力はまことに弱い。

われわれはどうするか。具体的な政治任務は具体的な環境のなかで立てられねばならぬ。すべては総体的であり、流動的であり、変化する。自民党政治をやつつける第一歩は反・非自民戦線（共闘）をつくること。共産、立民、社民、その他政治潮流の階級的「基盤と政治目標はちがう。立憲は民主主義一般、社民は社会民主主義、共産は社会主義をめざす。共闘、共同のたたかいは参加する党が党派制をはっきりすることが求められる。共闘の発展は新たな運動と情勢をつくり出す。その中で諸潮流も前進、発展する。

（滝野忠）

逆立ちした世の中を変える

Ⅱ 洪沢栄一にみる、資本家の哲学（二）Ⅱ

5、社会不安を小さいうちに防ぐ

☆「貧しくなつてから直接保護していくよりも、むしろ貧しさを防ぐ方策を講じるべき」「いかに自分が苦勞して築いた富だ、といったところで、その富が自分一人のものだと思ふのは、大きな間違いなのだ。要するに、人はただ一人では何もできない存在だ。国家社会の助けがあつて、初めて自分でも利益が上げられ、安全に生きていくことができる。もし国家社会がなかったなら、誰も満足にこの世の中で生きていくことなど不可能だろう。これを思えば、富を手に入ればするほど、社会から助けてもらっていることになる。だからこそ、この恩恵にお返しをするという意味で、貧しい人を救うための事業に乗り出すのは、むしろ当然の義務であろう。」（第4章 仁義と富貴）より）

☆「わざわざいを小さいうちに防ぐ手段として、ぜひとも『思いやりの道』を盛り上げていくよう切望する」（第7章 算盤と権利）より）

〈森の解説〉 4章部分の「社会から助けてもらっている」などという洪沢の考え方を「謙虚」と考える方もいるかもしれない。しかし私は、7章部分の「わざわざい・・・」以下の文章が、前述4（通信前号）、の最後に紹介した「貧富の関係は円満でなければならぬ」に続いているところから考えると、貧富の関係が階級対立にまで発展しないようにする、今日的に言えば、階級協調、格差是正、社会保障・セーフティネットの充実をしていくべきだ、資本主義の矛盾は小さいうちに防ぐ、という支配階級の本能的な考え方を表していると思う。だからこそ、洪沢は、慈善事業に力を入れた。

資本主義は、「資本の蓄積に対応する貧困の蓄積を必ず生む」と、マルクスは「資本論」（岩波文庫）で述べた。一極＝資本家階級には「富」が蓄積され、対極すなわち労働者階級には、「貧困、労働苦、奴隷状態、無知、粗暴、道德的墮落の蓄積である」と。対極は今日的に言えば、死者107名を出したJR西日本尼崎脱線転覆事故（2005年）、約16万人が避難した東京電力福島第一原発事故（2011年）など、独占資本の利潤追求の犠牲になったすべての方々を含んでいる。

その「資本論」は1867年の発刊であり、渋沢のヨーロッパ留学も同じ1867年1月から翌年11月である。渋沢がヨーロッパでどのような「労働者階級」を見たのかはわからないが、日本では1897年、各地の大工場の機械工を結集した日本最初の労働組合「鉄工組合」が組織され、その翌年には「日鉄矯正会」による、上野から青森までの機関士ら400余名が電報で連絡を取り合い、一斉に二日間をわたるストライキを行って東北線の列車運行を不能にし、団体交渉で10名の不当解雇を撤回させた（河出書房新社1975年発行田中勝之・鎌倉孝夫編集「日本労働者運動史4」）ような、労働者階級の組織的反抗も活発になる。「日鉄」とは、1883年に日本初の私鉄として開業した「日本鉄道」であり、渋沢は翌年以降、理事、後に取締役になった。

6、資本主義社会の取引ルールの定着を図る

☆「ヨーロッパの商工業者は、互いに個人でかわした約束を尊重し、損害や利益があつたとしても、一度約束した以上は、必ずこれを実行して約束を破らない。これは彼らの固い道徳心に含まれる『正義』や『廉直』といった考え方が、そのまま実践された結果なのである。ところが日本の商工業者は、いまだに昔の慣習から抜け出せずに、ややもすれば道徳という考え方を無視して、一時の利益に走ってしまう傾向がある。これでは困るのだ。欧米人も常に日本人がこの欠点を持っていることを非難し、商取引においては日本人を完全に信用しようとはしない。これはわが国の商工業者にとつて大変な損失である。」「日本の商業に携わる者すべてに、『信用こそすべてのもと。わずか一つの信用も、その力はすべてに匹敵する』ということを理解させ、経済界の基盤を固めていくことこそ、もっとも急いで取り組まなければならない事柄なのだ。」（第8章 実業と士道）

〈森の解説〉 日本と外国の貿易や国内の取引において、明治以降は「契約」という取引ルールが大きな位置を占めた。「契約」によつて、資金を借り入れ、必要な資材を購入し、労働者を雇い入れ、作った製品を販売して、売掛金を回収し、借金を返済する・・・。一つの例だが、「いつまでに返済する」という約束が守られないと、安心して融資もできない。契約不履行がまかり通れば、資本主義システムが回らない。そこで踏み倒しができないような、踏み倒しされても損害を取り戻せる社会的な仕組みが作られる。ちなみに「民法」「商法」は1898、99年に施行された。

7、女性への教育は、良妻賢母のため

☆「善良な女性からは善良な子供が生まれ、優れた婦人の教育によつて優秀な人材ができるものである。そうだとするなら、女性を教育してその知恵や能力を花開かせ、女性としての道徳を育んでいくのは、教育された女性本人ばかりでなく、間接的には善良な国民を育てるものとなるのだ。」（第9章 教育と情誼）

〈森の解説〉 ブルジョア革命以降「人間は自由・平等」だという建前のもと資本主義が発達する道が開かれたのだが、婦人参政権が認められたのがイギリスで1918年、アメリカでは1920年、日本では1945年であつたように、実際には、男女の政治的権利も長い間平等ではなかった。国会議員で女性が占める割合は、日本は今

でも9・9%で、世界で166位だという(3月8日「朝日」)。

日本の女性は戦前、「家」制度の下、NHKの朝ドラ「おしん」(1983年)に出てくる女性たちのように、無権利のまま虐げられてきた(小作制度も重なっていた)のであるが、当時「女性にも教育が必要」とは言ってもその動機は、資本主義国家日本にとって「優秀で善良な子供(のちの、労働力・兵士)」を育てるためであった。

8、まとめ

① 貧乏は「能力や努力の差」?

渋沢は、法や道徳に従い真つ当な方法で得た富は、何はばかることなく自分が享受すべき正しい富であるとし、貧富の差が生じるのは能力や努力の差であると主張する。しかし「能力・努力の差」は、資本家同士、農民や小商店主同士、あるいは労働者同士といった同じ階級内部の競争について言えることであり、おそらく彼も、そのつもりで言っていることと思われる。資本家と労働者の間にあるのは「共通の前提に立つて事業を行う家族的関係」と言っているからである。しかし現実の資本主義社会の極端な貧富の差は、資本家と労働者の間に現れ、拡大・発展する。

資本主義社会では、土地・建物・機械・原材料といった生産手段を一手にする資本家が片方において、もう一方には、自分の労働力以外売るものを持たない多くの労働者がおり、その労働者が生きていくためには資本家に雇われて働く以外にない。なるほど賃金が「価値通りに」払われていても、資本家には「剰余価値」というおいしい蜜が手に入り、それがたまりにたまっていくと今日の大きな資本になるのである。資本主義社会における「貧富の格差」は、資本家が労働者から剰余価値を搾取した結果であり、「努力の結果」でないことは明らかだ。

資本はより多くの剰余価値を求め、労働者を低賃金・長時間・非衛生的な職場環境で働かせる。労働者には現在の働き方・生活を「自分の能力・努力が足りない結果」と思わせ、「まじめに働き、より高給で働きがいの持てる仕事につくこと」を夢見させる。労働災害・職業病さえ、「本人の不注意」「健康管理は個人の責任」にする。資本家の搾取を隠して、「個人の能力や努力の差」というのが、今日まで続く典型的な「資本家的ものの考え方」と言えよう。

さらに言えば、前号4の〈解説〉で書いた「スタートは自由・平等」というのは、資本家(いわゆる「市民社会」)の作った虚構であり、現実マルクスが「資本論」で「資本は頭から爪先まで、毛穴という毛穴から、血と脂とを滴らしつつ生れる」と表現したように、封建社会から資本主義社会に至る歴史の過程の中で、「一方の極では社会の生産手段と生活手段を資本に転化し、反対の極では、民衆を賃金労働者に、自由な『労働貧民』に転化する」過程が、国家の力も使いながらかなり強力に行われた。日本でのこの過程は、明治の初年、地租改正による近代的土地所有の確立、秩禄処分による封建家臣団の解体、政府の国立銀行設置政策、株式会社制度による事業開始、大蔵卿松方正義による紙幣整理などとして、士族・農民の没落、プロレタリア化がすすめられた(東大出版会1973年楫西光速他著「日本資本主義の成立2」)。

ちように、渋沢栄一が活躍していた時代である。こうしてできた資本家と労働者のスタート時点での格差、そこから発展したより大

きな貧富の格差を、「努力の結果」というのは虚構に始まる砂上の楼閣であり、「自然の成り行き」「宿命」そして「あきらめるより外にない」とまで言うのは、「砂上の楼閣をごまかす虚飾の看板」ではない。

② 思想攻撃 1万円札、大河ドラマ

それではなぜ今、新1万円札の顔に、そしてNHK大河ドラマのモデルに「渋沢栄一」なのか？

一つには、1990年代初めのバブル崩壊以降長期にわたる不況と、顕著に進む日本社会の少子高齢化・人口減少、東日本大震災など自然災害の続発、中国と比べたGDPなど日本の生産力・国際的地位の低下、「脱炭素」など国際社会から迫られるエネルギー転換など、日本資本主義が抱える構造的課題（生産力と生産関係の矛盾）の大きさがある。

二つめとして、2007年頃から、日本を代表する企業や老舗において特に顕著になった、食品偽装事件（産地偽装・食べ残しの使い回し・事故米の食用転売・メニュー表示と異なる食材提供・廃棄食品の再販売）、原発故障隠し、原発番組・シンポでの「やらせ」、JR東日本信濃川発電所における違法取水発覚、JR北海道レール点検数値改ざん、防振ゴム性能偽装、マンション基礎工事杭のデータ偽装、自動車などメーカー各社による製品品質のデータ偽装、無資格者による検査、労働者に対する違法な長時間労働やパワハラなど、経営者の遵法精神や企業倫理が崩壊しつつある深刻さに対する、資本家階級総体の危機意識がある。冒頭で紹介したように、「今こそ原点に返り、企業は正しく富を収得し、搾取や貧富の格差（＝階級対立）を感じさせない、「持続可能な」（？）資本主義に戻ろう」ということであろうか。

森友学園国有地売却問題で139回、桜を見る会前日の夕食会問題で118回、事実と異なる国会答弁を繰り返していた（衆院調査局調べ、昨年11月25日・12月22日「朝日」安倍晋三前首相。「自助」（＝自己責任）を強調して「公助」（＝政治）の役割を放棄し、前政権と同じように政治を私物化して自分の身内や特定の業界に便宜を図ろうとする菅政権。そして政治家のウソに合わせて行政文書を改ざん・廃棄し、業者からの過大な接待に漬かりきる官僚の上層部。政治と経済の腐朽が相携えて発展？しつつある。

私たちは、資本による「渋沢栄一」を使った思想攻撃に惑わされず、事実として存在する階級矛盾・階級対立を労働・生活の場から目に見えるよう発掘・暴露し、コロナ禍の下でも社会の主要な富を生産し、滞りなく社会にその生産物が行き渡るよう働き続ける労働者としての誇りを忘れることなく、この逆立ちした社会を変えていくよう努力したい。

（2021年4月1日 森 勉・おわり）

労働者協同組合法の成立と国労闘争団の経験

労働者労働組合法の成立

昨年（2020年）12月、「労働者協同組合法」が全会一致で成立したことを歓迎する。同法は持続可能で活力ある地域社会の実現を目的とされ2022年12月までに施

行される。法律の詳しい内容については検討していないが、新聞報道では、この法律の特徴は出資した組合員が平等に事業に反映されるのが特徴で、多様な働き方や地域のニーズに合った就労機会の創出が見込まれるという。立憲民主党は枝野代表が「日本の働き方や経済、社会のあり方を抜本的に変える大きなきっかけになる」（2021年4月27日）と。東京・世田谷区の保坂展人区長は区では高齢者の居場所造若者支援などで民間団体やNPOと連携しているが、労協は事業体として最適だ、と指摘し区を挙げて労協設立を後押しする考えを示した（東京新聞2021年4月28日）、など同法律を過大評価する傾向もある。

「協同組合」で直ぐに思い起こすのが身近に存在する「生活協同組合」「漁協」「農協」「全労済生協」「県民共済生協」などである。

「協同組合」の歴史は古い。空想的社会主義者として名高いイギリスのロバート・オーウェンによって1819年に「完全な共產主義的社会組織ができるまでの過渡的方策として」協同組合（消費組合、生産組合）を始めている。これはそれ以来、商人も工場主も必ずしもいなくていい人物であるという証拠になった（エンゲルス著「空想より科学へ」岩波文庫48頁参照）。オーエンのこれらの実践については、同書をぜひ読み直してほしい。

日本における『労働者協同組合』の歴史

「労働者協同組合」は、労働者自身が所有し経営、管理する協同組合であるが、イギリス、イタリア、スペイン、フランスなど西欧で先行していたが、日本の歴史は浅い。日本における「労働者協同組合」（ワーカーズ・コレクティブ、又はワーカーズコープと称す）の歴史は共産党系が熱心にリードしてきた。中西五洲氏は1950年失業対策事業を始め自由労組を結成し、更に1953年に日雇い労働者を中心に全日本自由労組（全日自労）を結成し初代委員長に就任し長きにわたり委員長を務めた。更に1972年三重県民生活協同組合を設立し、1979年には中高年雇用福祉事業団全国連合会を創立し初代理事長に就任している。

また、「労働者協同組合」についての研究は、1985年の「地域コミュニティ・労働者協同組合研究会」（初代理事長・黒川俊雄慶応大学教授）で研究が開始され、1991年3月23日一般社団法人・協同総合研究所が設立されている。

同研究所は海外視察によって西欧の取り組みを調査し理論や実践、法制化について研究を進め、更に大学との共同研究によって法制化運動が高まり、厚生労働省等の委託研究事業となった。

2 度目の解雇と自活態勢の検討

国労は1990年3月に入ると2度目の解雇を阻止すべく団体交渉、ストライキ、大衆行動などを強化し、1990年1月18日24時間全国統一スト、19（21日72時間スト、集会、デモなど全力で取り組んだが、31日には解雇撤回の第18回団交が決裂し解雇が現実のものとなった。他方で関係省庁、自民党、経済団体に対して様々なルートを通じて非公式に解雇回避に全力を挙げた。これらの工作は社会党の田辺書記長らの非協力によって成果を得られなかった。

同時に、国労は小島忠夫中央執行委員を中心として1990年4月以降の態勢づくりを本格的に検討を開始した。当局側は1990年4月に残る人数について綿密に分析し50人程度と見込んでいた。私たちは1000人を超えることを実感として想定していた。

私は宮坂要書記長・小島中執からの要請で「生活と闘いの両立」つまり自活態勢づくりに参画した。民間の労働争議の指導者・経験者の協力を得て研究会を始めた。国労顧問の岩井章さんは、国家権力との闘いであることから厳しい闘いになることを想定し自身も勉強していた。その一つが「労働者協同組合」であった。岩井さんは中西五洲氏が委員長を務める全日自労の失業対策事業に大きな関心を持ち、その関係者から話を聞いて勉強していた。

国労は4月23〜24日、伊豆の労働学校で中央・地方の代表、清算事業団解雇者等150名を集め意思統一した。岩井さんは講演で、1000人の解雇者を国労組合員4万人で支えるためには、毎月1人5000円のカンパが必要だ、今後の闘いを進めるうえで生活対策をどのように確立すべきか研究しなければならない、と話された。

5月以降順次、全国の解雇者で「闘争団」結成を進め、12月7日に国労闘争団全国連絡会議(議長・神宮義秋||博多)を発足させた。

本格的な体制づくり『生活と闘いの両立』に向けて

小島中執を中心とした研究は進み、具体的な内容を提起するまでになった。その中心と据えられたのが民間争議の手法と全日自労の「労働者協同組合」であった。「労働者協同組合」については、協同労働研究所の菅野さん、東京大学社会科学研究所(戸塚秀夫教授)の森谷さん、東京地評オルグの小野寺さんらの助言を受けて、闘争団の有志も入れて学習・協議し実践に移した。

また、岩井さんは国労OBの定年後の再就職先を確保すべく「労働者協同組合」については全日自労の役員から直接説明を受け、様々な制約があることから「企業組合」(理事長・金井東京地本元委員長)を設立した。この企業組合を学び設立されたのが博多闘争団の「企業組合博多グリーンセンター」である。

「労働者協同組合」としては「ワーコレ留萌」「労働者協同組合音威子府」であった。

「労働者協同組合」は社会変革の担い手にはなりえない

実際に進めるうえで大きな壁にぶつかった。一つは、どう仕事を作るか、第二は法人として認められていないため資産(土地・建物、自動車など)を持っていないことである。音威子府、留萌は闘争終結後存続させるためにNPOに衣替えした。

法制化前の「労働者協同組合」は、前述のとおり経営的には不利な状態にありながらも1980年代のバブル期には事業拡大が進んだが、90年以降の不況の中では縮小傾向にあることも見ておかなくてはならない。

この度の法制化によって解決された部分はあるが、仕事については課題が残る。また「日本の働き方や経済、社会のあり方を抜本的に変える」との見方には疑義がある。

研究者の間でも、「労働者協同組合」が拡大成長することで社会変革の実現可能という意見と、社会変革論は国家権力や独占資本との階級闘争を無視するもので非科学

的、非現実的だとした批判がある。

収益を伴うNPOの法人実効税率は株式会社等の普通法人と同率(29・74%)であるのに対し、「労働者協同組合」は軽減税率(19%)が適用される。

しかし、金融・通信・運輸・流通など主産業が独占資本の下にある限り独立した事業になりえない。「労働者協同組合」が税法上優遇され、組織化が進んだとしても、経済全体の中では中心とはなりえず、その周辺に位置するしかない。言い方は悪いが隙間産業に限定されるだろう。当面、介護事業などが想定されているが介護事業の現状をみれば、経営も労働者の処遇も最低レベルになるだろう。従って利益は期待できず、軽減税率による恩恵は事実上ありえないし安定経営には課題が多い。事業が大型化し独占資本と対等な経済活動は出来ない、と見るべきである。結語として「労働者協同組合」が法制化されたとしても社会変革の力にはなりえない、ことだけは理解すべきであろう。

(2021年5月1日 山下 俊幸)

日本共産党綱領について

日本共産党は昨2020年に綱領を改定したが、旧綱領(04年)に比べて、遅れさせながら脱原発が入ったものの、主要な部分はさほど変わっていない。

必要なのは社会主義革命ではなく民主主義革命

「現在、日本社会が必要としている変革は、社会主義革命ではなく、異常な対米従属と大企業・財界の横暴な支配の打破——日本の真の独立の確保と政治・経済・社会の民主主義的な改革の実現を内容とする民主主義革命である。それらは、資本主義の枠内で可能な民主的改革であるが、日本の独占資本主義と対米従属の体制を代表する勢力から、日本国民の利益を代表する勢力の手に国の権力を移すことによつてこそ、その本格的な実現に進むことができる。」

独占資本が支配する現在、日本が必要としている変革は社会主義革命ではなく民主主義革命だとする。先進資本主義国でこんな珍妙な理論を中心にすすめるマルクス主義政党が他にあるだろうか。

大企業・財界の横暴な支配の打破はなぜ社会主義革命にならないのか。

革命とは階級間の国家権力の移行である。ところがここでは、ある「勢力」から他の「勢力」の手に国家権力を移すなどという非科学的な認識である。

独占資本にも、アメリカ資本に屈した悪い独占資本と、アメリカ資本に勝つてそれを吸収した良い独占資本とがあり、対米従属勢力と日本国民の利益を代表する勢力とに分かれているとでもいうのだろうか。

「対米従属」に反対して自主憲法制定や憲法改定を叫ぶ日本会議などの諸君はどちらの勢力に属するのだろうか。

その後の社会主義的変革——生産手段の国有化なき社会化

「以上のような民主主義革命の後に初めて社会主義的変革が開始される。」

「日本の社会発展の次の段階では、資本主義を乗り越え、社会主義・共産主義の社会への前進をはかる社会主義的変革が、課題となる。社会主義的変革の中心は、主要な生産手段の所有・管理・運営を社会の手に移す生産手段の社会化である。」

「その出発点となるのは、社会主義・共産主義への前進を支持する国民多数の合意の形成であり、国会の安定した過半数を基礎として、社会主義をめざす権力がつくられることである。」

『『国有化』や『集団化』の看板で、生産者を抑圧する官僚専制の体制をつくりあげた旧ソ連の誤りは、絶対に再現させてはならない。』

「市場経済を通じて社会主義に進むことは、日本の条件にかなった社会主義の法則的な発展方向である。」

「国会の安定した過半数を基礎として、社会主義をめざす権力がつくられる」というのに「国有化」をしてはならぬという。

社会主義の実現にとって、国有化が不可欠であることは、『共産党宣言』や『反デューリング論』などによって明白である。(社会通信2020年6月1日号、15日号参照)。国有化が悪いのではない。ソ連が何故に変質し、社会主義を蘇生できないまま反革命によって崩壊してしまったかは社会通信2021年2月15日特集号を見られたい。

国有化を経ずに、「市場経済を通じて社会主義に進むことは、日本の条件にかなった社会主義の法則的な発展方向である。」などは、科学から空想に逆戻りすることである。要するに民主主義革命の後は、社会主義革命・プロレタリアート独裁と生産手段の国有化抜きに、「社会主義的変革の中心は、主要な生産手段の所有・管理・運営を社会の手に移す生産手段の社会化である。」といたいのである。

社会化の意味と歴史的教訓

向坂逸郎は社会党の『理論センター報告』を読んで、次のように述べている。

「社会主義を実現するうえで不可欠の生産手段の国有化、プロレタリアート独裁を事実上否定し、かわりに〈社会化〉という言葉がむやみにでてくる。だが、社会化にはいろんな意味があるし、ある意味では、国家独占資本主義そのものが資本主義のなかでは、最高度に社会化され、計画化されている体制ですね。・・・」

社会化という発想は、すでに第一次世界大戦のときにドイツで試みられ失敗した歴史を持っています。労働者が権力を握らないでどうして投資のコントロールができるのですか。コントロールしようとすれば資本家はもうれつに反対します。」(向坂『右傾化に抗して』新評論、279〜280頁)

中国の大国主義・覇権主義はどこから生まれるか

新綱領では「いくつかの大国で強まっている大国主義・覇権主義は、世界の平和と進歩への逆流となっている」と旧綱領にはなかった言葉で中国を批判する。しかし中国が資本主義、国家独占資本主義、帝国主義に変質してしまっているからこそ大国主義・覇権主義が生まれ強まっていることは批判できない。

クレディ・スイス社の調査によると、資産5000万ドル（54億2200万円）超の超富裕層は、2019年現在で中国が、米国（8万510人）に次いで世界第2位の1万8130人。3位ドイツ（6800人）、4位英国（4640人）、6位フランス（3700人）、8位日本（3350人）を大きく引き離している。

別な統計によると、中国の資産10億ドル（1080億円）以上の超富裕層は米国の3倍の速度で増え、米国の696人を超え1056人となった。

企業の経営者や共産党の幹部や中央・地方の官僚幹部などが資本家になり、独占的大資本家になっているのである。対極には都市にも農村にも大勢の産業予備軍、失業者や半失業者が生まれている。

米日英独仏等と同様な国家独占資本主義、帝国主義に変容しているとみるほかはない。この数十年に英独や日本を抜き、米国に迫る帝国主義的不均等発展も顕著である。一帯一路政策も南沙諸島問題等もウイグル抑圧も帝国主義の現れである。

労働者階級国家の3原則に学べ

この変質はマルクス、エンゲルスがパリ・コミューンから学び取り『フランスの内乱』で明確にした教訓、そこからレーニンが『国家と革命』で整理した労働者階級国家の3原則を、中国共産党は無視あるいは軽視した結果にはかならない。

日本共産党が、この重大さを認識できないまま、「市場経済を通じて社会主義に進むことは、日本の条件になかった社会主義的法則的な発展方向である。」などとしていると、中国共産党の轍を踏むことは明らかである。（原野人）

◇信州松本通信◇

「新松本百景」で紹介された向坂逸郎著『マルクス伝』

園廉三（小林俊樹先生）と扉山人（向坂逸郎先生）を想う

(一) はじめに

目下縁あって、人民戦線事件（1937年12月15日）での向坂逸郎先生について勉強させてもらっています。本当に「縁あって！」を感じる昨今です。そして、高校時代の副担任にして国語の教師であった恩師小林俊樹先生（コバシユン）のことを思い出しつつ、もっと聞いておくべきことがあったのにと、後悔もしています。

小林俊樹先生は二〇一六年十一月二十七日に83歳で逝かれ、同年十二月十八日に深志教育会館にてお別れの会が行われました。愛妻の園子夫人が先生より一週間前に逝かれことも、この時知りました。お別れの会実行委員長の赤羽総一郎さんが東京大教学養部時代には塚本健教授のゼミ生であったこと、これも私には不思議な繋がりを感しました。ご案内のように、人民戦線事件に先立つ一九二八年（昭和三年）の3・15事件で、向坂先生と共に九州帝国大学を追われた塚本三吉氏の御子息こそ、塚本健先生だからです。

コバシユンからは高校時代に二年生で漢文と古文、三年生で現代国語と、一通り「赤点」をもらいました。そして卒業してからも（高校生の時は勿論！）、宴席とアルコ

ールの苦手な私は、お酒好きのコバシユンとのお付き合いを苦手とし、お声が掛かって出掛けられないという、不詳の教え子でした。

さて人民戦線事件での弁護士について、向坂先生は次のように記しています。

「私の弁護士になってくれたのは、いま大分県知事をやっている木下郁さんと榛村専一という私の妻のいとこでした。榛村は、もう故人になりました。ふたりとも、弁護士料は一文もとらないどころか、ときどき先方からもらい物をしました。」（向坂逸郎著『流れに抗して』講談社現代新書1964年12月刊）、と。ちなみに、私の書棚にあるこの本は百瀬嘉郎さんよりいただいた物ですが、百瀬さんはもう一冊向坂先生からサイン入りの贈呈本を持っておられました。

コバシユンの早稲田大学以来の親友である榛村純一氏の父上こそ、榛村専一弁護士だということであり、そのことから「新松本百景」の峠の新緑（松本市入山辺）という一文が生れたとのですから、紹介させて頂きたいのです。

〔中澤註〕静岡県掛川市長を長く務めた榛村純一氏は、『地方分権事始め』（岩波新書）にも登場する「アイデア市長」として有名でした。ゆき夫人からも純一氏の早稲田大学入学試験時の奮勇について伺っていますので、コバシユンとは本当に仲が良かったと思います。純一氏は早稲田大学入試の時の宿泊先は、向坂逸郎宅でありました。

木下郁氏は学徒動員中で戦死された息子淳さんを偲び、『追憶』（昭和二十四年三月発行）を私家出版するに当たり、向坂先生が松本駅西口の梅丸商店を紹介しました。梅丸商店主の與曾井湧司さんは百瀬嘉郎さんの旧制松本中学の後輩で親友でした。古い商家でしたが、郵便局や印刷業もされていたからです。『追憶』には向坂先生の「淳君の思ひ出」という追憶の記が収められています。

また、ローザ・ルクセンブルク著・山崎八郎訳『牢獄からの手紙』（1948年8月印刷）の出版もされています。この書籍は、向坂逸郎序・山崎八郎訳とあり、向坂先生の序文は「ローザ・ルクセンブルクのこと——女性と政治経済——」というタイトルになっています。ローザの人となり、ローザの『資本蓄積論』をマルクシズムの著作中の名著であり学ぶところが多いと紹介しつつ、日本の女性にはこの高度な専門書でなく、『経済学入門』を、そしてこれに加えてベーベルの『婦人論』をすすめた旨を書かれています。そして、実はこの序文の初出は、改造社の『女性改造』（1946年11月号）という訳です。

與曾井湧司さんは旧制松本中学生の時から亡くなられるまで、日記を毎日つけ続けられました。この日記に目を通させていただきましたが、百瀬嘉郎さんとともに向坂先生の松本での翻訳を含む執筆活動のお世話をされたことが、記されています。

（二）「峠の新緑（松本市入山辺）」～「扉温泉から森林浴をかね」

今は廃刊となってしまいましたが、松本平の地元紙『中日新聞松本ホームサービス』では「新松本百景」と題して、柳沢健氏による松本平の名所を描いた風景画に、小林俊樹先生が解説文を添えたものが連載されていました。毎号一面を飾っていたこの企画はなかなか好評で、ファンも多かったと思います。

今回全文を紹介させていただくものは、1991年5月2日（木）発行第683号での「峠の新緑（松本市入山辺）〜扉温泉から森林浴をかね〜」と題されたものです。

向坂逸郎先生が戦後三回に亘って『資本論』を翻訳し、『マルクス伝』や『資本論入門』等の他に長い論文を書くために逗留したのは、松本市入山辺の扉温泉明神館です。まずは、恩師小林俊樹先生の味わいある文章で、「扉峠の新緑」を楽しんでいただけだと思います。

〔中澤註〕『中日新聞松本ホームサービス』は松本平の各家庭に無料で配布される週刊新聞で、「新松本百景」連載の頃は、初代の上島忠志編集長の下、7万7000部が発行されている地域密着の情報誌でした。編集長の上島忠志先生（カミチュウ）私にとってはとても大切な高校時代の「政治経済」の恩師です。東大法学部で丸山眞男教授に提出したゼミ論文の「政治に於けるロゴスとパトス——木下尚江の思想をめぐって——」は、戦後の木下尚江研究の先駆けであったようで、活字にもなっています。カミチュウは「木下尚江研究会会員」でしたが、会員には家永三郎先生も名を連ねていました。私は卒業後も引き続き、カミチュウには郷土史や平民社によった人々の研究で指導を頂きました。何冊も頂いた本の多くは、鈴木茂三郎等社会党の関係者の伝記等でした。

峠の新緑（松本市入山辺）〜扉温泉から森林浴をかね〜

薄川をさかのぼり、中電の発電所のいくつかをめぐれば扉温泉にたどりつきます。近年完成したダムの下下にある群鷹館、昔ながらの位置に、鉱泉時代からの姿を留める明神館——扉温泉はこの二軒の湯宿によって、昭和の歴史をけみして来ました。

社会主義者向坂逸郎は、明神館の一室でその著『マルクス伝』を執筆しました。旅館の入り口の巨岩を覆う藤の花や、谷川のせせらぎに思索の疲れを癒したであろうことは、容易に想像されます。

峠への道は、この温泉場から一段と屈折を加えて登ります。針葉・広葉の緑の中を、時たまに上下する車を避けながらの森林浴です。カラマツの萌黄が覆いかぶさり、谷をはさむ山の雑木が、それぞれの特性を発揮して、ほどよい配色の妙を見せています。登れば、峠の茶屋ならぬ扉山荘を経、やがてビーナスラインに合流します。全山新緑の眺望です。

扉の名は、外からのものを一切はばむような、山荘近くの絶壁を削った切り通しに由来するのでしょうか。この切り通しに扉を立ててみたくもなりません。それとも、戸隠伝説とのからみ合いもあるのでしょうか。路傍には昭和二十九年の開道記念碑が建っています。

峠を東へ下れば、中山道和田宿も遠くはありません。上下する車も、年ごとに増えています。（園）（絵 柳沢健）

小林俊樹先生は現役の高校教師の時は、「園廉三（そのれんぞう）」というペンネームで地元紙等には記事を書いていました。「園」とは恋女房の園子夫人の「園」で、通常（園）と記していました。そして、先生によりますと「廉三」としたのは、「俺

の文は、三文廉いからさ。」と言うことでした。退職後に地元紙等に書かれる時は、「日本山岳会会員・著述業 小林俊樹」でした。教え子達は、「コバシユン」と親しみを込めて呼び、誰一人として「先生」とは言いませんでした。

(三) 何故に「新 松本百景」で『マルクス伝』なのか

ところで、コバシユンが何故に「新 松本百景」に向坂逸郎著『マルクス伝』が登場するのか、ということです。この説明をしておかなくてはなりません。

『道は一筋——向坂逸郎を語る』（向坂ゆき編）が刊行された時、松本の地元紙である日刊紙『市民タイムス』にはこの書籍が紹介されました。紹介文には、市民タイムスの古川寿一氏が向坂逸郎先生が亡くなった時に同紙に書いた「松本は第二の故郷」、昭和五年以来向坂先生との長い交友のあった元松本市連合町会長の百瀬嘉郎さんによる「なつかしき安曇野」「石井拍亭と大論戦」、そして『信州の旅』編集長の藤田靖夫さんによる「巨星落つ」に加えて、私の拙文「日本のマルクス・向坂逸郎先生」が掲載されていることも記されていました。

そんなわけで、高校時代に赤点を惜しみなくくれた国語の恩師である小林俊樹先生に、私はこの書を恐る恐る贈呈しました。すると、コバシユンから電話がきました。その内容は、次のようなもので大いにびっくりしました。

「おい、俺だ、コバシユンだ。向坂逸郎先生のことに興味持っているのか？ 向坂先生の人民戦線事件の弁護士、何て人か知っているか？」というのです。続けて「シムラ・セイイチ（榛村専一）って言うんだ。向坂先生の奥さんの従兄だ。俺の大学時代からの親友シムラ・ジュンイチ（榛村純一）の親父様だ！ それで榛村純一はなア、新婚旅行は扉の明神館へ来たってわけだ。まだ扉までのバスがないころでなア、俺たち夫婦が、松本駅へ迎えて、四人で明神館まで歩いたんだ。向坂先生が翻訳のために『資本論』の原書を担いで歩いた道を、歩いて登ったってわけさ！」というのです。

「峠の新緑」を脱稿される時も、コバシユンから連絡をもらいました。「扉峠のことを書くことになり、親友榛村純一氏のこと、そして向坂先生のことを念頭に書くと思う」という内容のものでした。

また、小林俊樹先生は『道は一筋』の冒頭に、岡田喜秋氏の「山に登らない人の山岳観」が収録されていることを大変喜んでいました。自身が、日本山岳会の会員であると共に、岡田喜秋氏とは親しく交友していたからです。岡田喜秋氏が2012年に『人生の旅人・啄木』を刊行された時も、小林先生はこの本の贈呈を受けたとして、『まつもと平タウン情報』に紹介文を書かれました。そんなわけで私は購入をすすめられ、購読しました。

(四) 扉山人による「扉温泉」く春は目の覚めるような新緑

私は小林俊樹先生に、「扉山人」の書いた「扉温泉」の紹介文を差し上げてありましたから、コバシユンはその一文にも目を通したうえで、前述の「峠の新緑」を書いたのだと考えています。

「扉山人」とは、もちろん扉を愛した向坂逸郎先生のことです。扉温泉明神館主で

あつた故齊藤忠房さんによると、向坂先生が「僕が宣伝部長をやるう！」と言われ、昭和30年頃の春に「扉山人」のペンネームで書いてもらったということですので、紹介させていただきます。

扉 温泉

扉（とびら）という謎のような地名が面白い。真理の扉、美の扉というような言葉を連想する。人生の幸福が、扉峠のかなたに深く秘められているかと思うような、人跡に荒されない山々のふところ、薄川の溪谷に扉温泉はある。松本市の東南四里、一、一〇〇メートルの高さである。

春は目の覚めるような新緑の中に、赤いつつじが素朴な人間のまごころを思わせている。夏になると、美ヶ原や鉢伏登山、避暑静養の客で静かな溪谷がしばしばにぎあう。しかし、涼風はここちよき室々には、読書人の来り遊ぶものは少くはない。秋は満山の紅葉燃えて、ボナールのようにけんらんとはえている。私はまた冬の扉を愛する。読書にあきた炬燵の中で、なにげなく溪流の音に耳をかたむける。遠くの方で大ぜいの人が、何かささやいているような錯覚をおこすことがある。私は酒をたしなまないが冬の扉温泉の炬燵の中で、気の合った友達がのみかわす酒の味は、かくべつであらう。

扉は、額に汗して働く人々や、その家族のなごやかないこい、たのしいまどいの場合である。温泉を弦歌のちまたとしか考えない人々には無援の所であらう。

（扉山人）

百瀬嘉郎さんは、「向坂先生は、信州人は自分でつくったわけでもないのに、信州の自然を自慢ばかりしている！」と言うんだと、苦笑いしながらよく言っておられました。しかし、この「扉山人」の文章からは、額に汗して働く人々への愛情とともに、信州の自然への気持ちも十分に伝わって来ます。

〔追記〕

コバシユンは昭和二十年の三月、旧制松本中学を受験し不合格となります。この時の話を兄上の小林和樹さんから聞いています。

学科試験は出来たと本人は言っていたというのです。しかし、口答試験が終わる時に、「絶対受からない！」と確信したというのです。五人一組の受験生が、陸軍の軍人による口答試験を受けたそうです。将来何になりたいか？ という質問に対して、他の四人は皆「陸軍の軍人になりお国のために働きたい！」とか「陸軍士官学校に行き軍人になりたい！」、「海軍航空士官学校へ行き・・・！」等々、皆軍人になってお国のために働きたい旨を、元氣よく述べたというのです。が、コバシユンは「文学を勉強し、文学者になりたい！」と言ったというのです。この時の、秀囲気たるや、想像してください。そういう時代だったので。

コバシユンは終戦の翌年、再度旧制松本中学を受験、無事合格したのです。一年ここで浪人したコバシユンは、一年目に早稲田大学の受験に失敗した榛村純一氏と、早稲田入学の同期生として出会ったのです。

純一氏は、早稲田の受験に際し、一年目は静岡県掛川から自転車で上京し、向坂逸郎宅を宿に受験に臨みましたが、自転車での上京で体力を使い果たしての受験ということで、試験会場では睡魔に襲われ、眠くて試験にならなかったそうで、あえなく不合格だったのです。

人の出会いとは、こんなものなのでしょうね。私もすんなりと行かなかった人生だからこそ、いろんな出会いがありました。

(二〇二一年二月二十四日)
問もなく早春を迎える里山辺で 郷土史記録係員 中澤 秀行)

◇読者からのおたより◇

豪雨・強風の下5・20老朽美浜3号機燃料装荷糾弾緊急抗議行動 5月20日、

福井県美浜町内で「老朽美浜原発3号機燃料装荷糾弾緊急抗議行動」が、「老朽原発うごかすな！実行委員会」の主催で行われた。2〜3日の準備期間にもかかわらず、福井嶺南地方や関西各地から50人の市民が参加。▽中島哲演さん気迫の訴え 正午に美浜町役場前に参集した仲間、すさまじい大雨と強風をもとせせずに、旗やノボリ、横断幕を掲げ、「美浜3号機の再稼働、絶対反対！」「危険な老朽原発、うごかすな！」「40年廃炉の約束守れ！」「燃料装荷を今からやめろ！」「事故被害を被るのは、美浜町だけじゃないぞ！」とシュプレヒコールをあげた。

▽実行委員会の木原壯林さんの司会で出発集会は進められ、地元・河本町議の情勢報告があり、反原発オール福井の中島哲演さんの挨拶が気迫に満ちていた。「40年越えの老朽原発を、50億円で了解した福井県知事は福井県の恥であり、絶対に許すわけにはいかない。この暴挙を私たちは絶対に止めねばならない」と。

▽デモ隊は福井県警・機動隊の厳重警備をはねのけ、美浜町内を堂々デモ行進し、JR美浜駅前の関電原発事業本部前で抗議のシュプレヒコールを叩きつけ、関電神原定征会長以下への美浜原発3号機再稼働準備即時中止の申し入れ書を全文読み上げ提出した。

(さいなら原発・びわこネットワーク、稲村守)

凍霜害被害は深刻 No.180(2021・6・1)今回も、松代荘前の丸型郵便ポストです。

この時桜が咲いていなかったたので再度撮影に行つて前号でお知らせしたということです。

また、前号でお知らせしました凍霜害被害は深刻な状況です。これから摘果シーズン。見るのが怖いです。田植えは5月23日・24日にやりました。毎日水管理に。梅雨はどうなるのかな？

(長野県飯綱町 山浦隆芳)

「相双の会」109号 コロナ禍でなんとなく憂鬱な日をお過ごしのことと想われます。苛立つ

の対応には呆れるばかりです。ワクチン接種についても世界各国の中でも最下位で、先進国などといったいるが、相手にされていない。ワクチン開発にしても大資本優先政治のため税金の使い道が間違っているため前へ進まない。なんでコロナ蔓延状況でオリンピックなのでしょう。

小学生の子供たちだって、「運動会、遠足も中止なのになんでオリンピックなんだ」という言葉が新聞投稿がありました。

コロナ禍のどさくさ紛れに放射能汚染土を減容するために再利用が浮上してきている。また放射能汚染林を燃やす「バイオマス発電」計画をするなど、将来に渡って庶民の命と健康を脅かしかねないことを平然とやろうとする。まさに原発事故を起こした電力会社優先そのものであり、正当化しようとしているのではないのでしょうか。

(原発事故被害者相双の会 國分富夫)